

法隆寺金堂天井板落書

久野健

はしがき

- 一、落書の位置
- 二、落書の數及び種類
- 三、落書の内譯
- 四、落書の年代
- 五、落書の繪
- 六、文様の試作
- 七、文字

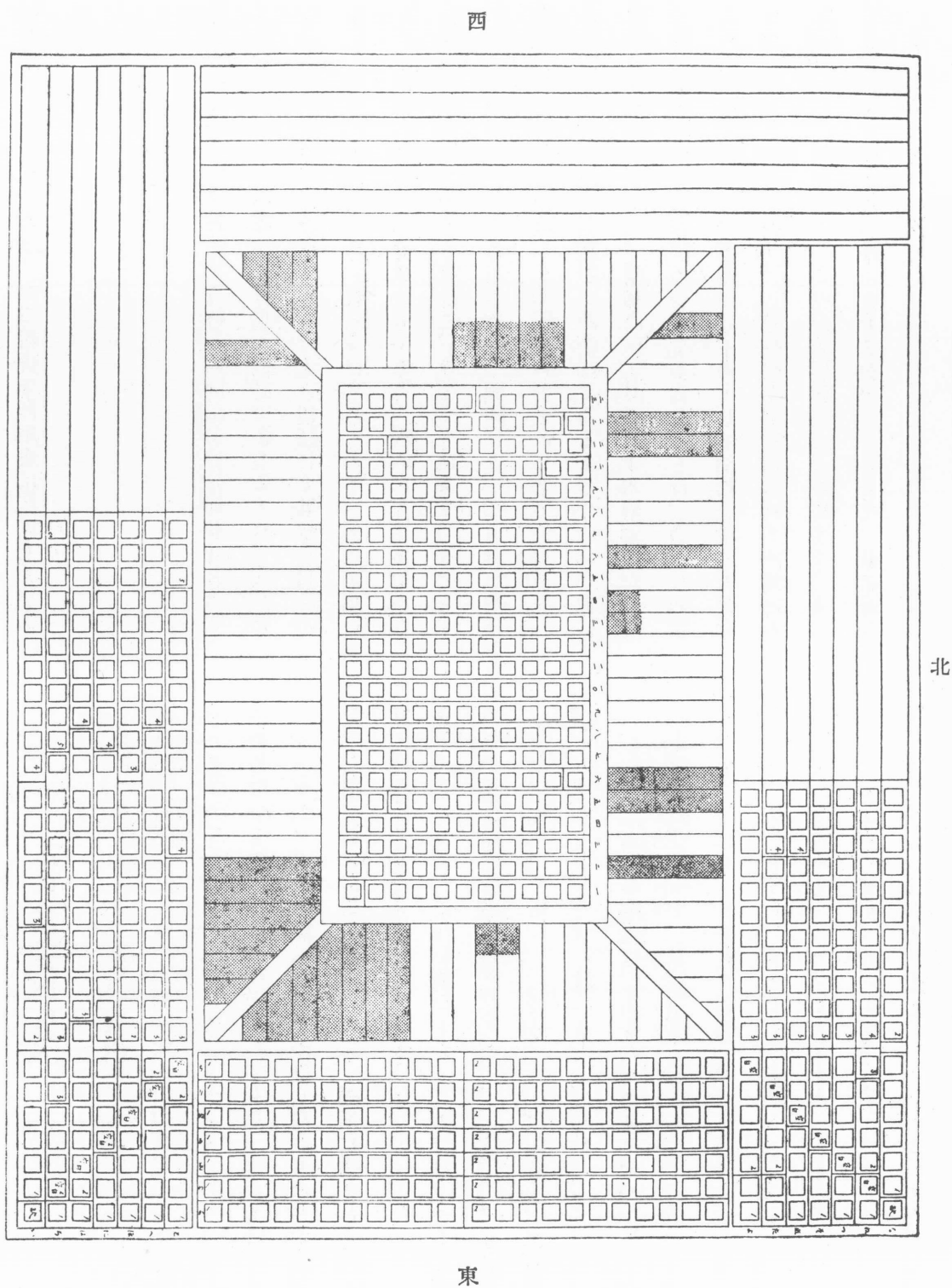
むすび

附 天井板落書目録

はしがき

法隆寺金堂の天井板から、きはめて古い落書が出たといふことはすでに一、二報せられたところで、耳あたらしいことではないかも知れない。しかし、これらの報道は、組織的に調査されたものではない。

なく、單に世人の注意を喚起したに過ぎない。今度發見された天井板の落書は、それ自身藝術價值にとぼしいものであつても、多くの問題を孕む法隆寺金堂の天井から出たといふこと、また資料の少い上代美術の何等かの傍證になり得るといふことは、美術史的には興味深いものと思ふ。その上、落書のかかれてゐる位置が、天井板が格縁に接觸する部分で、解體修理が了り、再びもとの位置におさめられた時には、ながく見ることの出来ない性質のものである。我々は、これらの諸點より組織的な調査を計畫し、法隆寺國寶建造物保存工事事務所の淺野清氏の一方ならぬ御援助により、この程その調査報告を世に出すことを得た。しかし、時間的不足その他の條件から、充分な調査とはいひ得ず、歸京してからも多くの疑點を生じ、その度に淺野氏にお訊ねし、再三の速達の往復にて解明した點などもあり、なほ不充分なところがあるかと思ふ。もつとも、天井板はまだ全部取外されてゐるのではなく、全體の三分の一（金堂天井平面圖中外陣天井の西半分）は残されてゐて、この部分から、なほ落



法隆寺金堂天井平面圖

書が出てくる可能性は充分ある。故に、これは中間報告であつて、今度の調査で不充分なところは、次の報告で補足或は訂正したいと思つてゐる。

一 落書の位置

法隆寺金堂の天井が内陣外陣に分れ、内陣天井は所謂折上組入天井で周圍に支輪があり、外陣天井は組入天井であることは、周知のことであらう。内外陣の天井は、ともに太い格縁にて基盤の目のやうに區切られ、その上に天井板が打ちつけられてゐる。落書が出てきたのは、^註これら内外陣の天井板からである。圖版に見える剝落した蓮花文様が、格間に相當する部分で、蓮花文と蓮花文の間の素木が、格縁の裏に隠れてゐたところである。圖版によつても分るやうに、現在見得る落書の大半は、この部分にかかれてゐる。残りは、胡粉地に釘のやうなもので引掻いてかかれてゐるもので、その數は八つほどに過ぎない。しかし、當初はいま見得る素木の部分だけではなく、胡粉地の下にも落書があつたであらうことは、容易に想像することが出来る。例へば、蓮花文の下地として胡粉を塗つたために、半分消されてしまつた顔^{圖版第十五}動物の上部が消されて四足のみ残つた圖^{圖版第十一の三}によつても、このことは知ることが出来る。また落書は天井板でも蓮花文様の描かれた表側だけにあつて、板の裏側には、いまのところ發見されない。

註 落書は、金堂解體作業中、天井板を取外したとき發見された。内陣の天井は昭和

二十年七月下旬の末、外陣の天井は同年八月中旬の初に取外された。

二 落書の數及び種類

現在までに出てきた落書の總數は、およそ二百二十八程になる。その内、内陣の天井板にかかれたものが百四十五で、外陣の天井板にかかれたものが八十三である。もつとも、落書であるから、わけの分らないもの、消えかかつてゐて判然しないもの、また一つと數へるべきか、二つと數へるべきか分らないものなどがあり、正確な數字を出すことは難しい。ことに、隨所に書かれてゐる文字は、相互の聯關が大切なので、これをバラバラにしてしまつては意味が半減する。しかし、これを讀むといふことには、充分な研究を要するので、文字の多く書かれてゐる個所は、出来るだけ寫眞版に紹介し、一般の研究に資することに努め、いまは便宜上、聯關のほぼ明らかなものでも一字を一つと數へることにした。

これら二百餘の落書は、かかれてゐるものの性質で分けると、繪と文様の試作、文字、及び筆ならしめ、に大別することが出来る。またこれを、かかれてゐる顔料（又はかいた材料）の方から分けると、朱（百十三）墨（百二）綠青（一一）胡粉（一一）朱と墨の混つたもの即ち朱墨（一一）胡粉と墨の混つたもの（二）胡粉地に釘のやうなもので引掻いてかいたもの（八）とに分けることが出来る。またもう一つの分類方法として、これらを胡粉下地の施される以前にかいたものと後でかいたもの、言ひかへれば、蓮花文様を描いた

以前にかいた落書と、蓮花文様彩色後にかいたと思はれる落書とに分けることも大切なのであるが、かうすると、どちらに入れるべきかはつきりしないものが出てくるので、私は敘述の都合上、最初の分類法をとることにし、顔料（又は材料）はその都度括弧の中に註することにした。

三 落書の内譯

二百餘の落書が、繪と文様の試作、文字、筆ならしのあと、に分けられることは先に述べた。次にその内譯を記載すると、繪に含まれるものとしては、顔の落書十七内朱九、墨七、釘のやうなもので引掻いて描かれたもの、顔の部分二十九内朱二十二、墨五、胡粉一、動物の蹄九墨九、性的な落書五内朱二、墨三、その他十二内朱三、墨八、及び判然せぬ繪十二内朱五、墨七に分けることが出来る。

またその内でも、顔の部分を眼だけ描いたもの七内朱五、墨一、胡粉一

二唇十一内朱九、墨二、眉と目一胡粉と墨の混つたもの、目と隈二内朱一、墨一、鼻と人中と口三

内朱二、墨二、眉と目と鼻二墨二、とに分けることが出来る。動物の蹄は、馬

のやうな奇蹄類の蹄七墨七、と牛のやうな偶蹄類の蹄二墨二、とに分

けられ、その他に含まれるものは、一つづゝしか出てこない落書で

伎樂面の落書や蛇の頭のやうなもの、また名稱を與へることの難し

いものを指す。判然せぬ繪とは、消えかかつてゐて明瞭でない繪な

どをこのうちに數へた。

文様の試作に含まれるものは、唐草や蓮花文様のやうなものを描いた落書を文様と呼び、ぶんまはしのやうな器具を用ひて描いた落

書を幾何文様と名づけ、文様十七内朱六、墨十一、幾何文様六墨六の二つに分けてみた。

文字の落書は、先にも述べたやうに一字を一つと數へ、現在讀み得る字を文字（七十九内朱四十七、墨二十五、胡粉一）と呼び、今後の研究により讀める可能性のある字を半解の字（二十三内朱十、墨十三）とし、消えかかつてゐて明瞭でない字を判然せぬ字（十七内朱六、墨四、釘のやうなもので引掻いて書いた）とし、この三つに分けた。總計百十六字あるが、そのうちに籠字が九つある。

筆ならしのあとは、私のノートでは五つとなつてゐる。もつとあつた筈であるが、充分書きとめておかなかつたので、いまは五つ内朱一、墨四と數へておく。

四 落書の年代

さて、次にこれらの落書はいつ頃かかれたものであるか、またすべて同時代にかかれた落書であるかといふ問題に移り度いと思ふが、これも残りの天井板が全部取りはづされてから決定すべき問題で、早急に結論を出すことは差控へ、現在私はかう考へてゐるといふにとどめておきたい。

今度發見された二百餘の落書が、天井板にかかれてゐるといふ性質から、これが天井板及び金堂の建築と密接不離な關係にあることは云ふまでもない。落書の年代を考へる上に、最も重要であると思はれる淺野氏のお話を次に記しておく。

法隆寺金堂の天井が、折上組入天井であることは前に述べた。はたして、法隆寺金堂の天井は、創建當初からかかる形式の天井であったであらうか。同氏のお話によれば、支輪上の格縁が金堂建築の基本部と組み合つてゐるから、始めから折上として計畫したものと見る他なく、後に折上式の組入天井に改造することは上層を解體しない限り不可能とのことである。然るに上層を解いた形跡は全然ない由で、始め單層であつたといふやうなことの無い限り、まづ當初から折上組入天井であつたと見てよいとのことである。次にこの天井に張られてゐる天井板、つまり落書のある天井板は、材の古さから見て、いかなる時代のものであらうか。これは、内陣天井二十ノ北及び支輪板の三十三枚天井平面圖中墨の塗つてある部分を除いてはすべて當初材、即ちこの建築の最も古い木材に屬するものださうである。註また、天井板は前に一度も取りはづされた形跡がないことは、板の周圍にある釘穴によつて知ることか出来る。但し、現に釘の存しない穴もあるが、板の穴とその下の格縁の穴が正しく一致してゐるので、板を取りはづしたのではなく、浮いた部分の釘を打ちかへたのであらうとのお話である。

天井板が當初材であり、嘗て一度も天井より取りはづされたことがないとするれば、まづこれらの落書も天井板と同時代と見ることは可能であらう。ことに、二百餘の落書が、朱、墨、綠青、胡粉等でかかれてをり、天井板の蓮花文様にまた同様朱、墨、綠青、胡粉の顔料が用ひられてゐることを考へ合はせると、此等は天井板蓮花文

様彩色の前後にかかれた落書と考へるのが、最も自然のやうに思はれる。以下、個々の落書を紹介しつゝ、年代にもふれてゆきたい。

註 當初材と云つても、千二百年前の木材であるか、千三百年前の木材であるかを見分けることは不可能である。

五 落書の繪

繪に含まれるものには、(イ)顔の落書(ロ)顔の部分(ハ)動物の蹄(ニ)性的な落書(ホ)その他の五つに分けられることは先に述べた。次にその各々について、いくらか細述してみたいと思ふ。

(イ)顔の落書 顔の落書が十七あるうちで、最も見るべきものは、とノ三の板に墨で描かれた老人の顔圖版第十五及び内陣天井十八ノ北に朱で描かれた三つの顔圖版第十及び圖版第十三の二の落書である。

とノ三の板に描かれた老人の顔は、文様下地として胡粉を塗つたために、顔の半分が消されてしまつてゐるもので、明かに蓮花文様を描く以前に落書されたと思はれるものである。しかし、これが大工などの落書ではなく、平生繪筆を持つ者の描いたものであることは、無駄のない調子のとれた線によつても知ることが出来る。恐らく、これは蓮花文様製作者の一人のいたづら書きと考へられる。

奈良時代には、寺院建築の天井彩色といふかなり機械的な仕事にも、一流の畫師が參加してゐたことは、東大寺大佛殿天井彩色の文書に註一より知ることが出来る。これによれば、塗白土即ち胡粉下地を塗る

やうな單純な仕事に、天平寶字三年頃の畫師の長上である上牛養や畫師として正八位下の階位を持つ河内石嶋等の一流の畫師も従事してゐる。そして、この大佛殿天井の文様彩色に参加したと傳へられる四十數名の畫師が文様彩色専門の畫師でなかつたことは、天平勝寶四年の三月から四月にかけて行はれた六宗厨子彩色の仕事に、このなかの畫師の名が見えることによつても明かである。^{註二}

内陣天井十八ノ北の板に描き残された三つの顔の落書も、畫師の描いたものと思はれ、興味深いものである。三つとも朱でかかれ、とノ三の老人の顔を描いた墨の筆よりは、やゝ太い筆が用ひられてゐる。

圖版第十三の三の顔の落書も、顔の上半分が胡粉に塗り消されてしまつたものらしく、文様製作以前に描かれたものであらうと想像する。この口をあけた顔の筋肉の動きは、和銅四年に作られた法隆寺五重塔内塑像中北面の涅槃像をかこみ悲歎にくれる人物の顔を想起させる。口をあけた時の顎の張りや、頬の隆起、また頬に出来る皺など、不用意に描いてなほこれだけにかけることは、この頃すでにかかる表情に富んだ顔が、多く描かれてゐたものではあるまいか。このことは逆に天井板落書の年代を考へる傍證となり得よう。

内陣天井十八ノ北にある二つの顔の落書^{圖版第十}も、また畫師のかいたものと思はれる面白いものである。恐らく二つとも同一人の筆であらう。この落書は、他の顔の落書に比べてすこぶる寫生味が豊かである。このことは、この落書が、眼の前に仕事をしてゐる仲間の

横顔をとらへたものではあるまいかと想像させる。この人物は二人とも、頭に頭巾をいただいてゐるが、當時の畫師工人等が寺の仕事に従事する際に、冠（租布三尺程）が給與されてゐたことは正倉院文書に明かなところで、このことも、二つの顔が當時の畫師の横顔であることを裏書きしてゐるやうに思はれる。この二つの顔で最も注意されるのは、その耳が同金堂壁畫の佛菩薩の耳に類似してゐることであるが、このことは次の顔の部分のところでも細述する。

十七の顔の落書中、頭巾をかぶつてゐるのは、この他に内陣天井十八ノ北にもう二つ（朱）わノ一（朱）そノ三（朱）等がある。このうち、内陣天井十八ノ北にある落書の頭巾は、有名な正倉院文書中天平十七年四月一日云々とある「寫經受紙帳」中にかかれた「大大論」の戲畫の人物が頂いてゐる頭巾と形式を同じくしてゐるが、他のものは、すべてその形式を異にし、しかもよく身についてゐる。

その上、「大大論」の人物ほど戲畫化されてゐないから、今後資料に乏しい上代風俗の有力な資料となることを疑はない。頭巾の落書は多いが、不思議と衣服の資料となるものは少い。衣服まで描かれてゐるのは、そノ三の人物だけであり、^{さん}衫かと思はれるものを着てゐるが、これも上半身だけではつきりしない。その他、髪^{かみ}の結び方の參考となるものには、るノ一の長い顎ひげのはえた顔の落書がある。

（ロ）顔の部分 落書の繪といふ概念に含まれるもの百十七あるうちで、最も數多くあらはれてきたのは顔の部分の落書である。こ

とに注意されるのは、筆ならしの程度に不用意にかかれた眼や鼻や人中や口が、我々の眼や鼻や人中や口には遠く、多くは佛畫に描かれてゐる眼、鼻、人中、口だといふことである。このことは、これらの落書の大部分が、天井板蓮花文様彩色に従事した畫師のいたづら書であることを語る、もつとも有力な根據であるが、いつさう注意されることは、それらの眼や鼻や人中や口等が、同金堂の壁畫中の佛菩薩のそれに類似してゐることである。

例へば、外陣天井のちノ二の隈のある眼（胡粉）は、北面西大壁の右脇侍菩薩の眼に似てをり、内陣天井二十一の鼻、人中、口（朱）の落書^{圖版第十三の二}は西大壁の右脇侍菩薩の鼻、人中、口に類似してゐる。また前に述べた内陣天井十八ノ北にある仲間の横顔の寫生と思はれる二つの顔^{圖版第十}の内耳の描き方は、同壁畫の佛菩薩の内耳の描き方に共通してゐる。この繪は、寫生であらうと想像されるものでありながら、耳のやうな比較的重要でない部分に作者の平生描きなれた耳の描き方が不用意のうちに出て來たものと思はれる。

以上のことは、何を物語るものであらうか。落書の年代から云つても、同じ金堂にある壁畫と天井板といふ位置の關係から見ても、その密接な相關關係は容易に想像される。また前にもあげた東大寺大佛殿天井彩色の場合、當時は一流の畫師も天井彩色のやうな仕事に従事してゐることもあり得るのであるが、落書中にあらはれた繪の筆力からみても、壁畫の作者と同一人物と見ることはむづかしいであらう。勿論、壁畫の作者も複數であらうし、このことは容易に

即斷することは避け度いと思ふが、例へば、内陣天井二十一の鼻、人中、口の落書と西大壁の右脇侍菩薩のそれとを比較してみると、前者がいかに不用意にかかれた落書とはいへ、力がなさすぎる。こゝに下唇の右端は筆の舌が出てしまつてゐて、壁畫の畫師ならいかに筆ならしに描いたにしても、かうは描かないだらうと想像される。また内陣天井十八ノ北にある二つの顔の落書の下の方の人物にしても、顎や髪毛は筆の調子を缺いてゐる。しかし、耳や鼻や人中や口などの形式的共通性は、まづこの落書が壁畫の作者の弟子か、もしくは同一系統の畫師または畫師たらんとするもののいたづら書と見ることとは、充分肯定出來ることである。

（六）動物の蹄 落書中には、内譯の中に述べたやうに、馬のやうな奇蹄類の蹄が二つ、牛のやうな偶蹄類に屬する動物の蹄が七つ、いづれも墨で描かれたものがみえる。不思議と蹄だけかかれてゐて上部が胡粉で消されてゐるもの一つを除き、軀までかかれたものがない。これだけ數多くかかれてゐるのであるから、單に偶然かいたものとは考へ難く、何か意味があるのであらうと思はれるが、私には分らない。識者の示教を仰ぐ次第である。

（ニ）性的な落書 内陣天井十六、内陣天井十八ノ北には、合計五つの性的な落書がかかれてゐる。陰莖やちよつと言ふをはばかれるやうなものもあり、寺院の天井ことに法隆寺の金堂天井にかうしたもの描かれてゐたとは、現在では一寸不思議な氣がする。しかし、唐招提寺金堂の梵天臺座にも同様な落書のあることから考へ

ても、當時の畫師たちは、かかる寺院裝飾の場合にも、かなり暢氣な氣持で仕事をしてゐたのかも知れない。また、天井板にかかる落書があるといふことは、これらの落書が後世の修理の際になされたものではないといふ消極的な理由になるであらう。

(ホ) その他の繪 その他に含まれる繪には、内陣天井十四の蛇の頭のやうなもの(墨) 内陣天井十五に人間の足先に似た恰好のもの(二)胡粉地の下に墨)内陣天井十八ノ南に笠をかぶつた人間のやうなもの(墨) 第十一内陣天井二十一に股引のやうな繪(墨) 第十二同じ板に伎樂面の落書(朱) 第十三 内陣天井二十二ノ北に轆轤頭のやうな落書(墨) 内陣天井二十二ノ南に井桁のやうなもの(緑青) 外陣天井とノ三に動物の頭(墨) そのほか一寸名稱を與へることが出来ないものが三つある。そのうち内陣天井二十一に描かれた伎樂面第十三 は、(ロ) に於て細述した同じ板にかかれてゐる鼻、人中、口の落書と同筆であらうと思はれる。現在では、博物館などで面だけとして見なれてゐる伎樂面が、この落書の描かれた頃には、實際に使はれてゐたから、かうしたかぶつた形の面が落書として描かれたのであらうと思ふと面白い。

註一 大日本古文書第四卷二七〇頁、正倉院文書續々修 四十五
註二 大日本古文書第十二卷二四七頁、正倉院文書續々修 四十六
帙三

六 文様の試作

文様の試作に含まれるものとしては、唐草文様の斷片、六瓣の蓮花文様や八瓣の蓮花文様の試作が十七 内朱六あり、墨十一、ぶんまはしのやうな器具を用ひて描いた圓やさうした圓を組合せたもの、即ち先に幾何文様と名づけた文様の試作が六 墨六 がある。前者には單に筆ならしの程度にかかれた斷片が多く、見るべきものが少いが、ただ蓮花文様の試作

天井板蓮花文様部分

一つ内陣天井十八ノ北にある蓮瓣の試作(朱) 挿圖は明かにこの天井板蓮花文様の一瓣に相當するもので、そのなれきつた筆使ひも、これが蓮花文様製作者の試作のあとであることを首肯かしめる。

この朱で描かれた蓮瓣の試作及び墨で描かれた六つの幾何文様は、未だに定説のない上代建築裝飾文様の製作過程を暗示するものとして興味深いものがある。

奈良時代の建築裝飾畫が

分業的であり、塗白土畫師、木畫師、墨畫師、塀畫師、彩色畫師なる名稱があり、それらの手を経て一つの裝飾文様が完成されたことは、正倉院文書畫師行事功錢注進文、大佛殿廂畫師作物功錢帳等には、

明記せられてをり、人のよく知るところであらう。しかし、これらがいかなる仕事を分擔したかについては、先學の間に種々異論があつて定説をみない。^{註一}塗白土畫師と彩色畫師とはその名が示す通り、

木地に胡粉下地を塗る仕事をする畫師と、彩色をする畫師のことであらうから問題はないが、木畫師、墨畫師と塙畫師については、未だにその仕事の分野がはつきりしない。勿論、塗白土畫師、木畫師、彩色畫師と云ひ、それらの仕事ばかり専門にしてゐた特殊な畫師があつた譯ではなく、仕事を迅速ならしめるために分擔して仕事をしたまでで、一人で同時にこれらの仕事をする場合もあり得ることは先の大佛殿天井彩色文書に明かである。

木畫については、澤村專太郎氏は「木地に花文の下地がきをなす事」と云ひ、野間清六氏は「下繪を描くもの」と云はれてゐる。堺

畫については澤村氏は「堺と云ふのは花文の輪廓線を畫いたもので木畫の地下繪を描線に依つて完備せしめたものを云ふ」野間氏は「堺畫師は仕上げの輪廓線をなすもの」と云はれてゐる。兩氏の文様製作過程を示せば、

澤村氏説では、まづ塗白土畫師が木地に胡粉地を塗り、木畫師がその上に花文の下地がきをなし、堺畫師がその下地繪を完備して花文の輪廓線を畫き、彩色畫師がそれに彩色を加へた。

野間氏説では、まづ塗白土畫師が木地に胡粉地を塗り、木畫師がその上に下繪を畫き、彩色畫師がその下繪に彩色をほどこし、塀畫師が仕上げの輪廓線をかいたといふことになる。

これだけで見れば、兩氏は製作過程の順序はちがふが、木畫にしる堺畫にしる言葉それ自身の意味はさう變らないやうである。しかし、それがなほ問題になるのは、木畫なり堺畫なりのてまと賃金との比例がとれないところにある。一例を天平寶字三年の東大寺大佛

殿天井板彩色の場合にとつてみると、塗白土の仕事は三十區で一文一區とは天井の格縁の一駒を指す、大佛殿の天井には一萬十一區あつたといふ。大きさは一區方八寸といふから法隆寺の天井板の蓮花文の描かれてゐる一區と大差なかつたと見てよ。木畫は八區で一文、塀畫は三區で一文、彩色は一區で二文とからう。

なつてゐる一體、奈良時代はきはめて實質的な時代で、畫師司長上從七位下の位階を持つ長老から、若輩の里人畫師に至るまで同じ仕事に對しては、まつたく同じ賃金が支拂はれたといふ時代なのである。このことは、またそれだけ畫家は工人的取扱ひを受けてゐたことを物語り、仕事の賃金なども、まつたく仕事のでまに比例して支拂はれたと考へられるのである。先の場合、塗白土畫師の三十區一文と彩色畫師の一區二文を標準にして考へみると、文様の下繪を描くかなりてまのかかる仕事をした木畫師の八區描いて一文の報酬は安過ぎはしまいか。望月信成氏もこの點を疑ひ、當時の裝飾文様は型紙か木版を用ひて描いたから輪廓線を書く仕事はかくも安くなつたのではないかといふ疑問を持たれたが、註五唐招提寺金堂の天井板文様等を調べた結果型を用ひてゐないことを確認された。法隆寺

の天井板文様も、圖版でも分るやうに各蓮瓣の大きさなども一樣ではなく、ことに先に述べた挿圖の蓮瓣の試作を見れば、たしかに型を使つてゐないことが明かである。

さて、次にこれらの文様の試作を参考しつゝ、法隆寺天井板蓮花文様の製作過程を考へてみよう。まづ、此の天井板の場合でも木地に塗白土、即ち胡粉を塗つて下地をつくる仕事が行はれたことは明かである。しかし、金堂天井平面圖でも分るやうに、天井板はみな同じ長さ同じ幅のものではない。大は三米に及ぶものから小は三十糎程のものまであり、その上、板の両端が斜めに切斷されてゐるものもある。故にこれらの板に格間に相當する部分、即ち蓮花文様を描くべき場所を決め、胡粉地を塗るのは單に物尺で定めるのは難しい。蓮花文様を描くべき場所を決めるには、どうしても板を格縁にあてがつてみなければ、その位置を決めるのは難しい仕事である。胡粉地が蓮花文から無駄にはみ出してゐないことも、このことを物語るものではないかと思はれる。さうだとすれば、塗白土の仕事の前に、板を格縁にあてがつてみて、胡粉を塗るべき場所のしるしをつける仕事があるわけである。

塗白土の次になされたと思はれる仕事は、胡粉地の部分（つまり格間に相當する部分）の中心を定め、ぶんまはしのやうな器具を用ひ、墨で二重の同心圓を描くことであらう。これが、つまり蓮花文様の蓮肉になる部分である。天井板蓮花文様の蓮肉の中心部には、いづれも釘のやうなものをつきさした跡が明瞭に残つてゐること、

及び先に幾何文様として擧げたぶんまはしを用ひて描かれた圓のうち、蓮肉と等半徑の圓圖版第十一のが多いことも、このことを物語つてゐる。

蓮肉の圓が描かれた後に、朱で蓮瓣が描かれたであらうと私は考へる。挿圖の落書は、筆の調子でもみようとして、まさに描かんとする蓮瓣を一にかいてみたものであらう。蓮瓣が描き上げられた時まつたく蓮花文の下繪は出來上つたわけである。この後に、その下繪に彩色がほどこされ、最後に墨線で書起しがなされてゐる。

以上が法隆寺天井板蓮花文様の遺作と、同じ板に作爲なくかき残された文様の試作を参考しつゝ考へられる天井板の文様の製作過程である。前記のどの仕事か木畫にあたり、いづれの仕事か塀畫に屬するかは、別の機會に述べたいと思ふ。

註一 黒川眞頼氏は國華第八十一號「本邦繪畫沿革説」に於て、澤村專太郎氏は「日本繪畫史の研究」中「天平時代に於ける繪畫」に於て、野間清六氏は建築史第一卷第六號「奈良時代の畫師に關する考察」に於て、それぞれ自説を論じてゐる。

註二 澤村專太郎著「日本繪畫史の研究」中「天平時代に於ける繪畫」

註三 建築史第一卷第六號「奈良時代の畫師に關する考察」に於て野間清六氏はこの説を述べてゐる。

註四 大日本古文書第四卷三五三頁正倉院文書綴々修二十六表裏書

註五 東洋美術特輯、日本美術史、寧樂時代下、望月信成氏「天平時代の繪畫論」

七 文 字

文字については、當時の文章などの知識にとぼしい私には、現在讀んですぐに意味のとれるやうなものは殆どない。また、文字に於ては相互の聯關があつてはじめて意味をなすのであるから、いま讀み得る字だけを拾ひあつめて記載することも無駄であらう。そこで文字がかたまつて出てゐるところは出来るだけ圖版に紹介し版圖第十二、三、その方面の研究家の指導を仰ぐことにした。

しかし、これらの文字を概観してみてもまづ氣のつくことは、これらの文字が古い時代のもの故に讀み難いといふだけではないことである。筆者があまり文字を知らない。一知半解の程度で字を書いてゐる爲に讀みづらいのではあるまいかと思はれることである。畫くわの足りない字や自信のない書き方をしてゐる字が多いのも、そのためではあるまいか。同じ字を繰返し繰返し書いてゐるのも、そのためではあるまいか。しかしこれも、當時の畫師たちの知識程度を示す資料とはなり得よう。

内陣天井二十一には享文大人長道といふ人名らしい文字が見える圖版第十二 奈良時代の畫師には黃文とか委文とか文のつく姓かばねを持つたもの

が多く、享文長道といふのも畫師の名前ではないかと想像されるが、新撰姓氏錄には享文なる姓は出てゐない。

また、文字のなかには、金堂天井の仕事に従事した大工が書いたものと想像されるものがある。即ち、外陣天井のへノ四、ほノ三、はノ四、ろノ五、いノ四の板には、朱で大二、大三、大五、大六、大七なる連續した番號があり、これは恐らく大工が天井板にふりこ

んだ覺書ではないかと思はれる。註その他、外陣天井りノ二の板には胡粉地に釘で歌らしいものが書きしるされてゐるが、剝落がはげしく肉眼では讀めないのは残念である。

註 仕事のために引かれた眞墨には悉く朱を用ひてゐるさうである。

むすび

私は以上で、現在までに出てきた二百餘の落書が、同金堂壁畫のかかれた頃、天井板蓮花文様彩色に従事した畫師たちによつて、大部分かかれたものであらうとの推定をこころみた。天井板蓮花文様が、壁畫と製作年代をほぼ同じくするものであり、同金堂の内陣天井が第四章で述べたやうに、創建當初より折上組入天井であつたとすれば、問題は自然同金堂の建立年代のことに及ぶであらう。しかし、ここで今度の解體修理に際して判明した事實を淺野氏からうかがつた。即ち、この天井板に用ひられてゐる釘と、金堂建築の基本部に使はれてゐる釘とは形式を異にし、前者には現在でも使はれてゐるやうな頭のある釘、後者には頭のない釘が用ひられてゐるといふことである。明かに頭のない釘の方が、先行する形式のものと思はれ、天井に使はれてゐる頭のある釘は、金堂建築に相當遅れて附加された裳階（及び五重塔の裳階）にも用ひられてゐることである。當時は無論、建築の場合など釘は入要に應じて鐵で註文し、寺で製作したものであるから、釘の形式の違ひは時間的へだたりを示すものと見てさしつかへないであらう。これらの諸點を考へ合せ

ると金堂建築の基本部は、天井板蓮花文様よりも時代が上るものと思はれる。

終りに我々の調査に際し色々御援助をたまはり、その上、前にかげた法隆寺金堂天井平面圖を頂戴した工事事務所の淺野清氏に誌上をかりて感謝の意を表したい。また、こころよく寫眞を貸して下さった飛鳥園小川晴陽氏及び小川光陽君に、その御好意を感謝しておく。

二十一、七、二十八

天井板落書目錄

天井板略號	落書	内容	備考
内陣 一ノ北	文様 墨一 珠文つなぎ		
二	蹄偶 墨一		
七	判然せぬ繪 墨一		
一一	筆ならし 墨一		
一二	顔部分 墨一 判然せぬ繪 墨一		
一三	文様 墨四 輪つなぎ他 幾何文様 墨二 文字 墨三 墨龍書一 半解の字 墨五		圖版第十四ノ(二)参照
一四	其他繪 墨一 蛇の頭半解の字 墨一		
一五	顔部分 墨一 朱一 限のある眼 2 其他繪 墨二 足の指のやうなもの 2 文字 墨一 朱一		
一六	顔部分 眉目鼻性的な繪 墨一 文字 墨三 青 半解の字 墨一 判然せぬ字 墨一		
一七	其他繪 墨二 朱一 幾何文様 墨一 判然せぬ字 朱一		
一八ノ南	蹄偶 墨二 其他繪 墨一 河童のやうなもの		偶蹄は四つを一つと 數ふ 圖版第十一参照
一八ノ北	文字 墨四 論有 顔 墨五 朱三 顔完全なもの 2 朱不完全なもの 墨五 朱三 顔部分 墨一 朱一 墨一 朱一 鼻 朱一 性的な繪 墨二 朱二 判然せぬ繪 朱一 文様 墨一 朱一 文様 墨一		
一九	文様 墨一		

外陣	二〇	顔部分 ^{墨一} 鼻人中口幾何文様 ^{墨二} 同心圓・半圓	圖版第十三ノ(一) (一)參照
	二二	顔部分 ^{朱一} 鼻人中口其他繪 ^{朱二} 伎樂面他 判然せぬ繪 ^{朱一} 文字 ^{朱三} 此 ^九 家 ^三 大 ^三 吞 ^三 畏 ^二 款 ^二 脱 ^二 道 ^二 文 ^二 而 ^二 人 ^二 長我吟思氣 九上生前黃種過甘半解の字 ^{朱一〇} 判然せぬ字 ^{朱四}	
	二二ノ南	半解の字 ^{朱一} 其他繪 ^{綠青一} 井桁 ^一	圖版第十二參照
	二二ノ北	其他繪 ^{墨一} 轆轤頭のやうなもの	
	二三ノ南	顔部分 ^{墨一} 眉目 ^{朱二} 人中口 ^{朱一} 鼻人中口 ^{朱一}	
	二三ノ北	顔 ^{朱一}	
	いノ三	蹄 ^{墨一} 奇 ^一 判然せぬ繪 ^{墨一}	
	いノ四	文字 ^{墨四} 長十束 ^{朱二} 墨大七 ^{朱一}	
	ろノ五	文字 ^{朱二} 大六 ^一	
	はノ三	判然せぬ繪 ^{墨一}	
	はノ四	筆ならし ^{墨一} 文字 ^{朱二} 大五 ^一	
	にノ三	文様 ^{朱一}	
	ほノ三	文様 ^{墨一} 文字 ^{墨一} 言墨大 ^{朱三} 三 ^{朱一}	
	へノ三	文字 ^{墨一} 上 ^一	
	へノ四	文字 ^{朱二} 大 ^二	
	とノ三	(朱) ^(朱) 顔 ^{墨一} 蹄 ^{墨一} 其他繪 ^{墨一} 頭判然せぬ繪 ^{墨一}	
	とノ四	文様 ^{朱一} 文字 ^{墨一} 大 ^一	顔後頭部胡粉地ニカ クル 圖版第十五參照
	とノ四	文字 ^{朱一} 申 ^{朱一} 筆ならし ^{墨一}	

ちノ一	文様 ^{墨一}	右の表の傍註括弧は法隆寺國寶保存工事事務所の目録に朱と記 したものの、その後の變色によつて我々が調査の際墨書と記録し たものである。
ちノ二	顔部分 ^{墨一} 眼 ^二 胡粉 ^一	
りノ一	蹄 ^{墨一} 奇 ^一 判然せぬ繪 ^{墨二} 文字 ^{朱一} 六 ^一	
りノ二	文字 ^{墨四} 吟 ^二 前家半解字 ^{墨二} 墨龍書 ^三	
ぬノ一	判然せぬ字 ^{墨龍書六}	
るノ一	顔 ^{朱一}	
るノ二	顔 ^{朱二} 蹄 ^{墨一} 判然せぬ繪 ^{朱三}	
わノ一	文様 ^{墨一} 七葉花 ^{朱二} 四葉花 ^{朱一} 八葉花 ^{朱一}	
かノ一	顔 ^{朱二} 半解字 ^{朱一} 判然せぬ字 ^{朱一}	
よノ一	顔部分 ^{朱一} 鼻 ^{墨一} 蹄 ^{墨一} 文様 ^{墨一} 朱 ^一	
よノ二	筆ならし ^{墨一}	
れノ一	文字 ^{墨一} 大 ^一	
そノ三	文字 ^{墨龍書一} 判然せぬ字 ^{墨一}	
つノ二	文字 ^{朱一} 大 ^一	
	顔 ^{朱一} 冠を著けた上半身	
	顔部分 ^{朱一} 眉目 ^鼻	

〔附記〕 これは文部省科學研究資金による調査報告である。